

---

# 俺の中の白悪魔

イリーガル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の中の白悪魔

### 【Nコード】

N7983W

### 【作者名】

イリーガル

### 【あらすじ】

赤月学園。この学園はかなり変わった学園だった。その理由は、毎日のように幽霊がわんさかであるからだ。だが、それは学園長が望んでやったことだった。なぜなら、この学園は、霊能者を育てるための学園なのだ。その赤月学園に入学した主人公、黒川亮は、入学式の日起きた出来事のせいで学園中から注目を浴びることになる！

## プロローグ

俺の名前は黒川亮。赤月学園の一年生。になる予定だ。

予定と言つのは、今日が入学式で、まだ正式に入学はしてないからだ。

「亮、早く起きないと入学式に遅れるわよ」

「わかってるよ。つか、もう起きてるし」

下の階からおふくろが入学式に遅れることを心配して声をかける。つっても、まだ六時なんだが……

「まあいいや。早起きはなんとかの得つていうし」

入学式は九時からなので、登校する時間を除けば後二時間半はあ  
る。

さて、何をしようか……

しばらく考えて、一つの結論が出てくる。

「うし、寝る」

早起きしても、何の得もないしな。二度寝が一番。時間になったら、おふくろが起こしてくれるだろ……うし……し……。

「ふあああああ」

良く寝たなあ。おふくろが起こしに来なかったってことは、まだ時間は――

時計 八時五十分

「やっべえええええ！」

後十分しかない！ 家からじゃ走っても20分はかかるってのに！

「って、ごちゃごちゃ考えてる暇はない。早く準備しないとな」

制服に着替え、必要な物をガツコウ指定のカバンに入れ、俺は部屋を飛び出し、階段を駆け下り、廊下で倒れているおふくろを飛び越え――って！

「おい！ 大丈夫かおふくろ！？」

「んー。もう食べられない……………」

おし。学校に急ごう。

ただ寝ているだけのようなので（なぜ廊下で寝ていたかは謎だが）俺はおふくろをそのままにして、靴に履き替え、家を後にした。

「ゼエ…………ハア…………ゼエ…………ハア…………」

現在時刻は九時ちょっと過ぎ。間に合いはしなかったが、この位

なら大丈夫だろう。

入学式の会場は体育館だったよな。

「え〜つと体育館は、と。あそこか」

体育館に小走りで向かう。

「ん？ なんだ？」

今は入学式の最中であろう時間なのに、かなり騒がしい。なにかあったのか？

「まあいいや。ささっとはいっちまおう」

俺は体育館の扉を開ける。

するとー

「えっ！ ちょっと！ そごどいてええ！」

「え！？ 何！？」

扉を開けた途端に女の子がこちらにかなりのスピードで向かってくる。

ていうか、あの子、足、無くない？ 肌も妙に白いし、浮いてるよ  
うに見えるし。

「って！ 観察してる場合じゃない！」

女の子？との距離は僅か1m。今からじゃ回避が成功する確率は  
ゼロに近い。だからー

「受け止める！」

「ちよっ！ アンタそんなことしたらー」

ドォーン！

なぜだ！？ なぜ女の子？とぶつかったただけなのに、爆発音とまばゆい光が出るんだ！？

しばらくすると、光は消え、目が見えるようになる。

「あーっれ？ 女の子が居ないぞ？」

まさか、あの一瞬でどこかに消えた、なんてことは無いよな？

「ちよ、ちよつと君、いいかね？」

「？ 何ですか？」

黒髪で、一般的な髪型で先生とおぼしき人が、俺の下に歩みよる。なんか、すんげえ震えてるんだが……

「ちよつと失礼するよ……」

そついつて俺の手を握るーって！ この人そつ言う趣味なのか！？

「あの、すいませんが、俺にそういう趣味はないので……」

「やはりそつか……」

興味がないってわかったんだから、その手を離して欲しい。

「おっと。すまないね。ありがとう」

「いえいえ。俺もこの学園で注意するべき人がわかったんで」

「？ 君は何を言っているのですか？」

あなたが同性愛者だと言っています。

「ねえ、今のつてまさか……」

「うん。きつとそうだろうね」

「あの子、かわいそう。しかもかなりたちの悪いやつなんでしょ？」

「うん。その辺の幽霊じゃなくて、悪魔クラスのやつらしいからね」

なんだ？ 俺の噂なのか？ てか、何言ってるかさっぱりわからない。

「ちよつと君」

「はい。なんですか？」

今度は違う先生がに声をかけられる。やっぱり俺何かマズいことしたのか？

先生の後をついていくと、白髪を腰骨当たりまで伸ばした怪しい婆さんの所についた。一体誰なんだコイツ？

「連れてきました。学園長」

「はあっ！？ これが学園長！？ ただのババアじゃん！」

「口を慎め！ 一応学園長なんだから最低限の敬語は使え！」

アンタも充分酷い。とはいえなかった。

「黒塚先生はもう下がっていいよ」

「わかりました。では」

そういつて黒塚と呼ばれた先生は姿を消した。

「さて。単刀直入に言おう。君は死ぬ」



## 第1話 一章 俺の中にいる悪魔

「……………は？」

学園長は何を言ってるんだ？

「だから、アンタは死ぬって言ってるんだよ」

「いや、それはわかってます。俺が聞きたいのはなぜ俺が死ぬのか、という点です」

「なんだい。気になるのかい？」

嫌な笑みを浮かべる学園長。なんかウザい。

「気になるにきまってます。死ぬなんて言われたら」

「ま、教えてやるうじゃないか」

そう言っつて、少し間を置いてから口を開く

「アンタの中には、悪魔がいるんだよ」

「悪魔あ？」

「悪魔がなんだかわからない、なんて言わないだろうっね？」  
「……………」

はい。わかりません。

「まさか、本当にわからないのかい？」

「……………はい」

バカを見るような目で俺を見る学園長。

頼む！ そんな目で見ないでくれ！

「仕方がないね。まずは悪魔の説明からだよ」

そういつて、学園長が一枚の写真を俺の前に出す。  
そこには、一人の少年が写っていた。

「この写真が何だっというんですか？」

「これが、悪魔だよ」

「……はあ？」

写真に写ってる少年が悪魔だというのか？

「すみません。俺にはただの少年に見えるんですが……」

「当たり前だよ。これは人型の悪魔だからね」

「人型の、悪魔？」

「そう。人型の悪魔だ」

ってことは、悪魔にも種類があるってことか。

「それじゃ、悪魔の姿の説明はもういいね？」

「ええ。大丈夫です」

「そうかい。じゃ、悪魔の能力の説明に移るよ」

俺が悪魔の姿を理解したことを確認すると、学園長は次の説明に入る。

「アンタに関係しているのは人型だけだし、人型の説明だけでいいね？」

「ええ。大丈夫です」

俺が知りたいのは悪魔の話じゃなくて、なんで俺が死ぬのか、なんだがな。

まあ、悪魔の能力が俺が死ぬ事に関係があるよだし、いいか。

「人型の悪魔の能力は、人に憑りつくき、憑りついた者の生命力を奪うことだよ」

「憑りついた者の生命力を奪うって……」

つまり、俺が死ぬ理由ってのは……

「アンタが死ぬってのは、悪魔に生命力を吸われて死ぬ、ってことだよ」

「何いいいいいい！？」

どうする！？ 学園長が嘘を言っているようには見えないし、俺本当に死ぬのか！？

「おい学園長！ なんとかできないのか！？」

この年で死ぬなんて冗談じゃない！ まだまだやりたいことはあるんだ！

「そうさね、何とかできないことも」

「ちょっと待って」

どこからともなく、声が聞こえてきた。

だが、あたりを見渡しても俺と学園長以外誰も居なかった。一体どこから

「ここだよここ」

もう一度同じ声が聞こえる。なんか、すんげえ近くから聞こえるんだが……

「あ、アンタ、憑りついた状態で話すことができるのかい？」

「そうよ。私はそこいらの下等悪魔とは違うんだから」

ん？ 憑りついた？ それに、悪魔って……

「まさか……」

「やっときずいたの？私にはあなたに憑りついている悪魔よ」

「はあああああ！？」

## 第2話

「うるさい。静かにしてよね」

「あ、すまんすまんーじゃない！本当にお前には俺に憑ついているのか!？」

「ええ。そうよ」

「んなバカな！」

そしたら、俺は本当に死ぬのか!？まだやり残したことだって沢山あるのに！

「心の中で取り乱しもしないで。私はアナタの心の中にいるから、アナタの考え、全部聞こえちゃうんだから」

考えも読まれてるし。

「それと、心配しなくていいよ。私はアナタの生命力を奪ったりしないから」

「そ、そうなのか?」

「ええ。もちろん。というか、奪えないのよねえ」

ため息混じりの声で悪魔がそう告げる。

奪えないってのは一体どういうことだ?

「悪魔。アンタ、おかしくないかい?」

「なにがおかしいんですか?えーっと……」

「学園長でいいよ」

「わかりました。ババア」

「よし。今すぐコイツを消してあげようじゃないか」

「待つて待つて！ 冗談ですよ学園長！」

できれば話を続けて欲しい。

「あ。ごめんね。えーっと、学園長。私のなにおかしいんですか？」

そうそう。その話。なにがおかしいのか気になってたんだよね。

「アンタ、霊力の出方からして、白悪魔だろ？」

「そうですよ。というか、アナタ凄いですね。私、霊力はかなり抑えているのに」

「アタシは第一級霊能者だからね。それぐらいはわかるよ」

「おい。早く話を進めてくれ」

なぜコイツらが喋ると話が逸れていくんだらうか……………

「あ、ごめんね。それで私は白悪魔だけど、それがどうしたというの？」

「白悪魔だって、生きる為には人間の生命力が必要だらう？」

「必要ですが、なぜそのようなことを？」

「だから、生きる為には憑ついた者の生命力を奪わないといけないのに、何でアンタはそいつから奪えない、なんて言ったんだい？」

「ああ。それはですね、この子の力が強すぎるからですよ」

俺の力が強い？ それは霊力が強い、ってことか？

けど、俺は特に霊力が強いってワケではないはず。

「まあ、自分では気づけないはずだよ。だって」

少し間を置いて、悪魔が続きを話す。

「あなたの霊力、ほとんどが封じられてるから」  
「なんだと……？」

俺の霊力が、封じられている？

「そう。それもかなり小さい頃からね。何か覚えてないの？」  
「いや、何も……」

「そう……。記憶も消されているようね……」

つつても、俺の中に本当に強い霊力があるのか？

「信じなさいよ。私はアナタの中にいるんだから」

まあ、それもそうか。

「それで、こっから先は学園長さんと二人で話たいから、ちょっと体を借りるわよ」

「おい、ちよつとま……」

あれ、なんか、意識が遠ざかって……

「大丈夫。すぐに終わるから……」

### 第3話（前書き）

すいません。色々と用事がかさなりまくってupがとてつもなく遅  
れました。これからはちょくちょくupしていきます！



### 第3話

「ねえ、どうしてあなたはいつもここにいるの？」

「どうしてって、僕がここにいたいからに決まってじゃないか。君こそ、なんでいつもここにいるの？」

「そ、それは……あなたに会いたかったから……」

「え？なんて言ったの？」

「……知らない！」

「ねえ、ちよつと待ってよ！」

「何！」

「……名前」

「……え？」

「君の名前、教えてよ」

「う……うん。私の名前は――」

「う……」

目が覚めると、俺は見知らぬ部屋のベッドの上にあった。

「あ、目が覚めたなね。よかった。このまま目を覚まさないんじゃないかと心配してたのよ？」

どこからともなく声が聞こえてきた。

声の主を探すため、俺はあたりを見渡すが、人影はなかった。

「空耳か？」

俺も寝起きだから、寝ぼけてたんだろう。

「ちよつと！なんで無視するのよ！」

今度は声の出所がハッキリと分かった。俺から出てる声だ。

「……つて！俺はこんな女みたいな声は出せねえ！」

「大きな声ださないでよ！頭に響くじゃない！」

「ちよつと待て！状況が整理できない！」

「アンタまさか、さっきのこともう忘れたの？」

さっきのことって……あ。

「おいお前！早く俺の体から出ていけ！」

そつだ！こいつは悪魔だ！なぜか俺に取り憑いた悪魔だ！

「だ？か？ら！アンタの力が強すぎるせいで私は本来の力を発揮できないの！わかる！？私だってこんなとこ一刻も早くでたいわよ！アンタみたいな冴えない男に好きでとりついてるんじゃないのよ！」

「んだとコラア！俺のどこが冴えない男だって言うんだよ！」

「頭の中からつま先まで全てです」

「な……！そこまで言わなくてもいいじゃないか！少し傷ついたじゃないか！」

「あなたの心はもう傷だらけでしょう？」

「何だとお！」

「ハイ。そこまで」

背後から突然声が聞こえ、自然と後ろを向く。

そこには、160cmくらいの身長で、白衣を着た女の人立っ

ていた。

「君、独り言を言うなら、もう少し静かな声でね？一応ここは保健室なんだから」

「あ、はいすいませんーじゃない！独り言じゃないです！もう一人居るんです！」

「どこにも居ないじゃない」

ああもう。なんでこういう時だけ押し黙るんだよあの悪魔！

「そりゃあ、アンタが苦しんでるのを見るのが楽しいからに決まってるーはっ！」

フツ かかったなバカ悪魔め！

「このクツソ〜！悪魔をはめたな！」

「はまる方が悪いんだよば〜か！」

「ねえ、アナタ……悪魔が取り憑いてるの？」

保険の先生が、俺にそんな事を言ってきた。

「あ、はい。そうです」

「……………解体したい……………」

「えっ……………？」

なんか、今凄く危ない言葉を聞いた気が……………。

「あ！……………な、なんでもないわ！今言った事は忘れて！」

「は、はい……………」

「ええっと、そうだ。自己紹介がまだでしたね。私は白石カズネ。

赤月学園の保健室の先生よ」

「あ、俺はー」

「名前を教えちゃだめ」

「え……？」

今、誰かの声が聞こえた気がしたんだが……

「？どうしたの？名前、教えてくれないの？」

「あ、いえ。俺の名前はー」

「あ、起きてたのね。今お薬を……」

「え………？」

同じ顔の先生が、二人！？

「ええっと、あなたは誰ですか？」

先ほどやってきた先生が、最初からいた先生に問いかける。

「………こしだったのに」

「え？」

「後少しでえええええ！」

「なっ………！」

突然叫び出し、人の姿から、ひとならざる者の姿へと変わっていった。

まさか、コイツは………！！

「ええ………悪魔ね………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7983w/>

---

俺の中の白悪魔

2011年12月11日21時52分発行